

# 言語とアイデンティティ—日本に住むフィリピン人を中心に—

## Language and identity: Focusing on Philippine residents in Japan

河原俊昭 (京都光華女子大学)

Toshiaki KAWAHARA (Kyoto Koka Women's University)

### Abstract

The existence of an ethnic community is crucial for maintaining ethnic languages and cultures. Although more than 210,000 Filipinos live in Japan, no Philippine community has so far been established there. Therefore, it is unlikely that Philippine culture and languages will be passed down to the next generation. Due to the nonexistence of an appropriate ethnic community, Philippine women who have a Japanese spouse are developing multiple identities in relation to several cultures and languages. The development of their children's identities is found to be disrupted by changeable place of residence and unstable family conditions. Such children should be given a chance to develop their linguistic identity through mother tongue education. Unless their ethnic identities are well developed, disintegrated identities may result.

### 1. はじめに

日本に住む外国人の数は、2009 年末の時点で、2,186,121 人で、日本の総人口の 1.71%に当たる(法務省登録外国人統計)。この数は、一時的に減ることはあっても、長期的には増加傾向が見られる。欧米先進国の例から判断して、外国人の数が総人口の 10%以上を占めるようになる日がいつか来るものと予想される。

この登録外国人の国籍の内訳は、中国が 680,518 人、韓国・朝鮮が 578,495 人、ブラジルが 267,456 人、フィリピンが 211,716 人、ペルーが 57,464 人、アメリカが 52,149 人である。日本では、歴史的な背景から朝鮮半島からの移住者が、ながらく外国人の中では最大の集団であったが、2007 年から中国人が最大の集団となっている。全体として、アジアから、とりわけ東アジアから来日した人が多い。

本稿では、このような背景のもとで、フィリピン人の言語とアイデンティティに焦点をあわせる。フィリピン人が日本で生活するなかでどのような言語問題を抱え、どのようなアイデンティティの変貌を経験するかという点を述べていきたい。

### 2. フィリピンという国の特質

#### 2.1 多言語国家としてのフィリピン

フィリピンの国語はフィリピノ語(タガログ語)<sup>1</sup>である。公用語はフィリピノ語と英語である。主要な地方語として、イロカノ語、ビコール語、セブアノ語、ヒリガノン語、パンパンガ語などがある。また、スペイン語とのクレオールであるチャバカノ語なども話されている。

フィリピンは多言語の国である。国全体で 50 から 70 ぐらいの言語があるとされている。フィリピン国内を頻繁に移動する人はいくつかの言語を知る必要がある。ただし、これらの言語は言語的に近い関係にあるので、他の言語の習得はさほど難しいことではない。フィリピン人は多

言語状態に慣れているので、日本に来たフィリピン人が日本語という新しい言語の習得にさほど心理的な抵抗を感じないようである。

フィリピンでは、教育とマスコミを通して、フィリピノ語が普及をしている。日本に滞在するフィリピン人の間でも、フィリピノ語が共通語化している。また、教育の影響もあり英語への関心は高く、積極的に英語は学ばれている。

フィリピンの民族は話す言語で分類される。この民族／言語にはステレオタイプなイメージが結び付いている。イロカノ人はケチであるとか、ビザヤ人は田舎くさいなどのイメージは海外のフィリピン人の間にも持ち込まれている。日本に住むフィリピン人同士の会話の時にも、「あの人は～出身だから、～である」という話題になることは多い。

フィリピノ語(タガログ語)は、マニラの首都圏で使われる語であり、この語の洗練した使い方ができると一定以上の階層の出自であることの証明になる。人々は相手のタガログ語の話し方に注意を払う。首都圏から離れた地域のなまりのあるタガログ語、地方出身者のタガログ語、スラム地域のなまりのあるタガログ語の話し手は、粗野であるという印象を与える。

## 2.2 フィリピンの言語教育

公立学校では1974年に成立した二言語教育法の下で、文系の科目はフィリピノ語で、理系の言語は英語で教育を受けている。私立学校は国語以外の科目はすべて英語で授業をする場合がある。このような教育制度から、一般的に、人々の英語の能力は高い。その英語は母語の強い影響をうけたフィリピン英語であり、タグリッシュ(Taglish=Tagalog+English)とも言われている。

一般の人々には、英語習得への強い熱意がある。海外で働く場合は、英語は不可欠であり、国内でも専門職の仕事には英語が不可欠であり、社会的に成功をおさめるための重要な道具と考えられている。

## 2.3 フィリピン人の Exodus(海外への流出)

フィリピン人は伝統的に海外で働くことが多い。海外で働くことはきわめて自然なことであると考えられている。海外で働く人からの送金額がGDPの1割を占めており、海外で出稼ぎすることの必要性は広く認識されている。クリスマスの際になると海外から帰国する人々で空港はあふれる。彼らは「ヒーロー」として、大統領自身が空港まで出迎えることがある。

海外で働く場所として、サウジアラビア、アラブ首長国、クウェート、カタール、香港、シンガポール、イタリア、台湾などがある。日本も2004年までは数多くのフィリピン人がエンターティナーとして働いていたが、日本政府のビザ制限の方針<sup>2</sup>のために興行ビザで職を得る機会は激減している。

海外で働くフィリピン人の特徴は、女性も積極的に海外で働いているという点である。海外フィリピン人の約6割が女性で、彼女等は世界各地でメイドや看護師などの仕事に従事している。男性は船員として世界の各地で、労働者として中近東で働く。専門職である医者や看護師などの医療関係者も英語圏で職を求めて働くことが多い。海外での職はかなりの収入を約束してくれるので、多くのフィリピン人が積極的に国から出ることを考えている。

都会に住むフィリピン人では、親族の中に海外で働いた経験者が多くいて、その成功談を聞くことも多い。海外で働くことの心理的なハードルは低いのである。自国における経済不振のために、働き盛りの人々が十分な職を見つけれないので、海外での職を積極的に見つけようとする。

しかし、これはフィリピンの有能な人材が自国でその力を貢献しないで、他国に貢献するという意味で問題となっている。海外への Exodus はフィリピンの抱える大きな問題もある。

## 2.4 根無し草としてのアイデンティティ

フィリピン人は、よく根無し草(rootless)であるといわれる。フィリピンの思想家のコンスタンティーノ(Constantino 1982)は次のように述べている。「元来は、フィリピンはマレー文化を継承してきたのに、16世紀以降スペインの植民地となり、西洋の宗教であるカトリックが広まった。20世紀初頭からはアメリカの植民地になったために、自らの言語を軽んじて、英語の修得に熱心になってしまった。若者はアメリカ文化に強くあこがれて、ハリウッド映画を楽しみ、ジーンズをはき、マクドナルドを食べている。近隣のマレー人の国々は伝統を守りながら国家運営をしているが、西洋に強く影響されたという点でフィリピンは大きく異なる」

このように、コンスタンティーノは指摘している。たしかに現代のフィリピンでは、マレー文化は自分たちのアイデンティティからは遠いものだと感じられている。フィリピン人にフィリピンはマレー人種の国であることを指摘すると、多くのフィリピン人は困惑したり否定したりする。

だが、彼らもアメリカ文化に強い拒否反応を示した時代があった。1960年代は、反米闘争、基地反対闘争などを切っ掛けとしてナショナリズムの高揚した時代であり、当時国語とされたピリピノ語<sup>3</sup>に人々の関心が集まった。その時代、国家運営は主に英語で行っていたが、ピリピノ語を発展させて、この言語で司法・行政・教育ができるようにして、フィリピンを真の独立国にしたいと知識人たちは考えたのである。

しかし、現代では、タガログ語(=ピリピノ語、フィリピノ語)がそんな熱い思いで語られることは少ない。現状では、経済的な苦境ゆえに、自国への愛着は薄れ、国外への脱出を求めている。むしろ英語が彼らの未来を保障してくれる言語になったようだ。

## 3. 日本に住むフィリピン人

### 3.1 日本に住むことの偶然性

日本に住むフィリピン人は、偶然日本に住むことになった人が多い。特に日本の文化や言語に関心があって来日したわけではない。海外で働く機会を求めているうちに、たまたま日本で働く機会が見つかり、それを利用したということになる。来日したフィリピン人と日本とのつながりは「偶然性」という要因による。

日本国内でフィリピン人はどこに住んでいるか表1を見てみよう。ここでは、上位の7都道府県だけの数字を載せている。

**表 1：フィリピン人が日本で居住する都道府県**

都道府県名	人数
東京都	31,567
愛知県	25,923
神奈川県	18,447
千葉県	17,278
埼玉県	16,854
茨城県	8,021
群馬県	6,080

(資料：法務省登録外国人統計 2009 年末)

比較的太平洋側の県に在住している人が多い。これらの地域は産業が盛んであり働く機会も多い。これらの県は、フィリピン人に限らず、外国人労働者が多いという特徴がある。なお、一時期アジアから来た花嫁として有名になった秋田県は 621 名、山形県は 694 名と在住するフィリピン人の数は多くはない。3.4 項とも関係するが、特定の地域や都市に集中することはなく、一応まんべんなく居住しているという点が特徴となる。例えば、対照的に、在日するシンガポール人 2,560 人は、およそ半分の 1,229 人が東京に住んでいる。

### 3.2 在留資格の種類

日本に滞在するフィリピン人の在留資格には、いくつかの特徴がある。フィリピン人の合計数は 211,716 人であり、その内訳は表 2 が示すように、「永住者」と「日本人の配偶者等」が多い。また、永住志向が強くなり、永住権の取得者がここ数年増加し続けている。これは「日本人の配偶者等」の在留資格者が永住権を取ることが多くなったからである。近年、在留資格は、以前と比較して「興行」が減少、「研修」、「特定活動」が増加している。

**表 2 フィリピン人の在留資格**

在留資格の種類	人数	百分率
永住者	84,407	39.9
日本人の配偶者等	46,027	21.7
定住者	37,131	17.5
特定活動	8,608	4.1
興行	7,465	3.5
短期滞在	6,705	3.2
研修	3,970	1.9
その他	21,373	10.1
合計	211,716	100%

(資料：法務省登録外国人統計 2009 年末)

日本人と結婚したフィリピン人は、当初は「日本人の配偶者等」という在留資格を持つことに

なる。表 2 では、該当者は 46,027 人である。その後何回か「日本人の配偶者等」という在留資格を更新したあと、入国管理局に申請すれば、資格が「永住者」となる。そして、その中の何人かは最終的には日本国籍を取る。前項でも述べたが、「日本人の配偶者等」としての在留資格の多さに注目すべきである。表 2 によれば、総数の 21.7%となっている。結婚して何年かたつと、永住資格を取れることを考えると日本人の配偶者として在住するフィリピン人の数はもっと増える。

この点で、中国人の在留資格と比較してみる。2009 年末では、日本人の配偶者等の在留資格を持つ中国人は 56,510 人である。絶対数は多いが、日本に住む中国人の総人口は 680,518 人にもなるので、比率は 8.3%と比較的少ない。中国人も近年、日本人の配偶者となることが多いのであるが、全体の比率からすると「日本人の配偶者等」の在留資格を持つ人の比率はフィリピン人の方がはるかに多い。

### 3.3 日本人の配偶者

表 3 は、登録外国人数が多き国 6 カ国を並べたものである。男女別に見ていくと、フィリピン人には女性が多いという点の特徴である。フィリピンの在住者は女性が多いという点、また「日本人の配偶者等」の在留資格を持っている人が多いという点から、日本人男性と結婚したフィリピン人女性が多いと判断される。事実、厚生労働省の人口動態統計でも、毎年多くのフィリピン人女性が日本人男性と結婚をしている。例えば、婚姻数が最大であった 2006 年では 12,150 人のフィリピン人女性が日本人男性と結婚をしている。なお、日本女性がフィリピン男性と結婚する数は少なく、2006 年は 195 人である。

表 3：男女別の登録外国人数

国別	総数	男性	女性
中国	680,518	285,548	394,970
韓国・朝鮮	578,495	264,296	314,199
ブラジル	267,456	145,292	122,164
フィリピン	211,716	47,204	164,512
ペルー	57,464	30,336	27,128
米国	52,149	34,415	17,734

(資料:法務省登録外国人統計 2009 年末)

このように、在日するフィリピン人は、多くが女性であり日本人の配偶者となっているという点から、どのような特徴が見えてくるだろうか。まずコミュニティーの問題から見ていこう。

### 3.4 コミュニティーの有無

21 万人以上のフィリピン人が日本に滞在している。帰化して日本国籍を取得したフィリピン系日本人、オーバースティのフィリピン人を加えるとこの数は 21 万人を上回ることになる。それならば、フィリピン人のコミュニティーが日本国内にできあがりそうであるが、実情は国内の各地にバラバラに住んでいて集団で住んでいることは稀なようだ。フィリピン人のコミュニティー

一の特徴は、「存在しない」ことが大きな特徴となる。この点が他の民族グループと比較して際立っている。

各民族は自らのコミュニティーをつくりあげている。例えば、日本には、コリアタウンと呼ばれる所がある。新宿の新大久保や大阪の鶴橋や生野が該当する。中国からの移住者も各地にコミュニティーを作り上げている。比較的ニューカマーが多いのは池袋であり、池袋北口に住む中国人は約 6000 人であると言われている。神戸華僑(オールドカマーが多い)は 1 万人以上いると言われている。また、長崎市の新地町には長崎新地中華街と呼ばれる中華街があり、横浜の中華街、神戸の南京町とともに日本三大中華街と称されている。

ブラジル人をはじめとして南アメリカからの移住者が多く集まる都市が太平洋側を中心にあり、そこは外国人集住地域となっている。これらの都市は、定期的に外国人集住都市会議<sup>4</sup>を開いて外国人への政策に共同歩調を取ろうとしている。とりわけ、ブラジル人が多いことで有名な所がいくつもある。豊田市の保見団地は人口の 45%がブラジル人を中心とする外国人であり、群馬県の大泉町は人口の 15%がブラジル人であると言われている。

中国人、韓国・朝鮮人、ブラジル人などがそれぞれコミュニティーを形成しているのだが、21 万人もいるフィリピン人の間にコミュニティーが生まれていないという事実は大いに注目に値する。

これは、ひとえに在日するフィリピン人は女性が多く、かつ日本人の配偶者であることによる。国際結婚という形によって日本社会に入り込むと、民族コミュニティーの形成は難しくなる。もしも、フィリピン人同士で結婚して日本で家庭を持つならば、それはフィリピンコミュニティーの核となるのだが、その核が存在しないのである。

### 3.5 外国人学校の存在

外国人学校が存在するならば、その言語や文化は継承されやすい。民族の文化や言語の継承のためには民族の教育機関<sup>5</sup>の存在が必要となる。各民族は日本に移住してきた当初からそのことを意識している。

ブラジル人の増加につれて、ブラジル人学校が多数生まれてきた。2007 年時点で 95 のブラジル人学校が存在する。また、ペルー人も増加して 3 つのペルー人学校が存在する(その中のモンド・デ・アレグリア校は「各種学校」として公的にも認定されている)。中国人に目を向けるならば、中華学校は東京 1 校、神奈川に 2 校、大阪に 1 校、兵庫に 1 校ある。これらの学校の目的は、中国語の教育と中華文化の普及である。神戸中華同文学校は小学部(466 名)と中学部(174 名)がいて、中華学校の中では、最多の生徒が在籍する(朴三石 2008:102)。また、韓国・朝鮮に関しては、相当数の朝鮮学校と韓国学校があつて、民族の文化と言語の継承に熱心である。

一方、フィリピン人学校は日本には存在しない。26 万人のブラジル人の間で、95 の学校が存在して、6 万人弱しかいないペルー人の間で三つも学校があるのに、対照的に、21 万人以上いるフィリピン人の間で学校が存在しない。

もっとも、月刊『イオ』編集部が編纂した『日本の中の外国人学校』は、フィリピン人の学校として、「国際子ども学校」(ELCC=Ecumenical Learning Center for Children)を紹介している(月刊『イオ』編集部 2006:48-53)。この学校は、20 名ほどのフィリピン人の子どもたちにボランティアの人達が教会の集会室で授業をおこなっている<sup>6</sup>。ただ現段階では私塾という形であり、正式な教育機関という体裁にはなっていないようだ。

### 3.6 ニューカマーとオールドカマー

オールドカマーは戦前・戦中から住んでいる東アジアからの人々である。かれらの言語能力はすでに日本語のネイティブ並になっている。若い世代は民族の言語が話せなくなっているの、言語的には日本に同化していると言えよう。一方、文化の面においては、日本社会への同化はしていない、あるいは同化に反発しているようにも見える。それは、同一民族での家族が多数存在して、独自の民族コミュニティを形成していて、自らのアイデンティティを保持できているからと思われる。

フィリピン人たちは、ニューカマーであるが、独自のコミュニティが存在しない点から日本の文化や言語に比較的早く同化しそうである。しかし、その過程はいろいろなバリエーションがあり、単純に「同化していく」とは言い切れない。そこから、特に、アイデンティティの発達から見て、子どもたちにどのような言語教育を与えるかという難しい問題がある。

## 4. フィリピン人それぞれの事例

### 4.1 いくつかの事例から

筆者は2004年に、「在住フィリピン人女性の新しい言語アイデンティティ」という論文の中で、金沢在住のフィリピン女性(20名)にインタビュー<sup>7</sup>をして彼女たちの言語とアイデンティティについて報告している(河原2004)。本稿では、その時に紹介しきれなかった資料やその後に入手した資料に基づきながら、フィリピン人の言語やアイデンティティについて再度述べてみたい。インタビューした人々は主に3種類に分けられる。①日本人と結婚したフィリピン人女性、②労働者として働くフィリピン人男性、③夫婦の間の子ども、である。

### 4.2 日本人と結婚したフィリピン人女性

金沢在住のフィリピン人の共通語は、タガログ語である。マニラ首都圏出身者であれば、日本語、英語、タガログ語の三つの言語能力を持っており、地方出身者ならば、さらに自分の母語である地方語を話すことができる。いずれの言語でも互いにコミュニケーションすることができるが、通常は、タガログ語で意思疎通をおこなう。

同郷の人間どうし、例えば、ルソン島北部出身者どうしが出会えば、同地の共通語であるイロカノ語を用いる。しかし、彼らの会話に他の地方出身者が加わると、フィリピン諸民族の共通語であるタガログ語に切り替わる。さらに、日本人や英語が分かる外国人が会話に加われば、日本語や英語へと切り替えが行われる。会話の構成メンバーに応じて、ふさわしい共通語が選ばれていくのである。例えば、筆者が会話に加わると、使われる言語は英語か日本語へと即座に切り替えられる。

彼らは、来日当初は初歩的な日本語能力しかなかったが、急速に日本語を覚えていく。とりわけ国際結婚したフィリピン人女性たちは、日本語の覚える速度が速い。彼女たちはきわめて意欲的に学んでいく。日本語だけの世界に囲まれるのであるから、実用の点では、当然日本語が必要となってくる。

フィリピン人たちは、来日前は日本語教育を受けた経験は少なかったようだが、来日後は個人教師や国際交流センターの日本語教室などで、日本語教育を受けた人が多い。これらの授業は役に立ったと彼女たちの多くは述べているが、日本人教師が有能であったというよりも、彼女たち

の日本語学習への高い動機付けがその理由と思われる。

インタビューした人の中には、日本国籍を取ることに積極的な人と、消極的な人がいた。当初は、このことは彼らの言語アイデンティティの視点から(つまり日本語や日本文化への共感度が異なるから)と筆者は考えたが、実情は、もっと功利的な理由のようである。つまり、母国に送金して不動産を取得できた人は、いつかはフィリピンに帰り、そこで余生を過ごしたいと考える。不動産所有のためには、フィリピン国籍を保持していたほうが都合がいい。しかし、母国に不動産などの財産を何ら持たない人は、日本での国籍取得に熱心になるという傾向が見られるようだ。

### 4.3 日本語の書き言葉の問題

彼女たちのアイデンティティに日本語はすんなりとは結びつかないようである。その理由の一つとして、日本語の書き言葉の問題がある。インタビューした人たちの多くが、「日本語は読み書きが難しく、家庭に配布されるパンフレットや配布物の内容が分からない」と述べていた。フィリピン人に限らず、日本語はある程度話せるが、読み書きができるのはひらがなとカタカナだけという外国人が多い。しかし、日本で生活していくには、家庭に送られてくる、お知らせ、パンフレット、回覧板などを読みこなす力がないと不便である。また、定期的を送られてくるこれらのパンフレットを見て、理解できなければ、自分は日本社会の中では異質の存在であるという意識になる。

日本に滞在する期間が長くなるにつれて、日本語が自分の言語アイデンティティの一部になっていくのであるが、話す能力だけに著しく偏り、読み書きがほとんどできないという状況は変わらない。音声だけでなく、文字や書籍・印刷物という可視的な存在を通して、人々の言語への愛着は育つのであるが、その部分が欠けていることになる。日本語が、彼女たちの言語アイデンティティの一部になるとしても、話し言葉としての日本語だけに限られていくという点は大きな特徴である。

### 4.4 英語力に対するプライド

高い英語力は彼女たちのプライドになっている。英語の有用さゆえに、フィリピン人は重宝がられることがある。日本人と比べるならば、比較にならないほど英語が上手であり、英語の読み書き能力もすぐれている。大卒ならば、英文の契約でも正確に書きあげる。英語力を生かして、ビジネスウーマンとして輸入業を営んだり、ホテルの従業員としてのバイト、英語塾の講師、家庭教師、市役所の国際交流の手伝い、小学校での国際理解教育の講師として働く人も多い。

彼女らの意識の中には、日本語→英語→タガログ語→地方語、という序列があったが、日本人と接するようになると、日本人の持つ強い英語コンプレックスに気づくようになる。日本人の中では、序列は英語→日本語という順番であることを発見する。彼女たちの中では、日本人の下手な英語が、からかいの対象としてよく話題に上る。母国にいた時は、さほど意識しなかった英語の市場的価値が彼女たちのプライドの源になる。英語という上位の言語能力で、日本語能力のハンディを補うのである。とすれば彼女たちには「元エンターティナー」「貧しい国からの出身」という負のイメージが与えられがちだが、英語力によって、「英語に堪能な国際人」という正のイメージに転換することができるのである。

#### 4.5 フィリピン人女性の流動性

インタビューしたフィリピン人女性たちは、その「流動性」が印象的であった。彼女たちは、居住地の変更、家族との別離、日本人の夫との出会い、離婚など、多くの流動を経験している。彼女たちは現代の流動的な社会の申し子と言えるだろう。

フィリピンでは、現在、大都市の人々を吸引する力は強くて、多くの人々が地方から大都市へ移動している。そのことを踏まえて、金沢在住のフィリピン人を「流動性」をもとに分類すれば、次のようになる。①フィリピンの大都市に育ち、そこから日本へきた人々、②フィリピンの地方に生まれ、大都市へ行き、そして日本へきた人々、③フィリピンの地方から日本へ直接来た人々、である。

①②グループの何人かは、エンターティナーとして日本へきたのであり、日本に関する情報をかなり事前に入手しており、また教育程度も比較的高く、言語的には多言語話者であることが多い。③は主として、結婚紹介業者により、日本にきた人々であり、日本に関する事前の情報はほとんど入手しておらず、タガログ語か地方語しか話せない例もある。彼女たちの教育水準はあまり高くない。

#### 4.6 工場で働くフィリピン人男性研修生

金沢郊外の製材工場で働いていた男性研修生 6 名にもインタビュー<sup>8</sup>する機会があった。彼らは、20代から30代の男性たちである。彼らは、日本での技能研修という名目で来日したのであり、日本語の学習も研修の中に含まれている。日本語能力に関しては、日常会話程度にとどまっている人が多い。彼らは専門の日本語教師から授業を受けているのであるが、国際結婚した女性グループほど高い日本語能力を示さない。理由としては、工場で機械を扱うという仕事の内容もあるし、数年後には母国に帰るという意識も挙げられるだろう。またアパートで仲間うちで集団生活をしているゆえに、日本語を使う機会が少ないことも理由と考えられる。

ところで、帰国の日が近づいたある日、かれらの一人が突然アパートに帰らなくなった。いわゆるオーバースティとなったのである。追従する人が出ることを恐れて、雇用主は全員を即刻フィリピンに帰すことにした。グループの人たちは帰国予定の日まで働きたかったのだろうが、後味の悪い帰国となった。

### 5. 新しい言語アイデンティティ

#### 5.1 新しい言語アイデンティティ誕生の可能性

根無し草とよく言われるフィリピン人のメンタリティーだが、国外に出ると、ますます自分たちの伝統的なアイデンティティは意識されなくなっていく。フィリピン人は、自分のアイデンティティを簡単に捨ててしまうと嘆く人もいる。しかし、このような根無し草の態度は一概に否定されるものであろうか。逆に、肯定されるべき点があるようにも思える。これは新しいパラダイムを提供するものと考えられるのではないか。この点を、金沢在住の二人のフィリピン人を例にして考えてみたい。

インタビューしたフィリピン人女性の言語能力だが、彼らは、いわゆるマルチリンガルが多い。Aさん(40代女性)は、フィリピンの各地で働いた経験があり、フィリピンの言語は、6~7言語ほど話すことができると述べていた。フィリピンの諸語は、オーストロネシア語族に属して、互いに似ていて覚えやすいのであるが、Aさんは、これらの言語に加えてサンボアンガ市で話されて

いるチャバカノ語(スペイン語と現地語の混合語)や英語, 日本語も巧みであり, すぐれたマルチリンガルであった。

Aさんにとっても, 母語だけが自己の言語アイデンティティというよりも, 自分の言語レパートリーにあるすべての言語がアイデンティティの源になっているようである。Aさんは, インタビューの時に, 各言語の挨拶の言い方や数字をすらすらと述べて, 「これらの言語は自分が生活した地方の思い出と結びついていて, とても貴重なものです」と述べていた。Aさんの中で, これらの言語は, すべて統合されて, 多元的なアイデンティティの基盤となっていると考えられる。

Bさん(50代の女性)に, 「あなたにとって一番大事な言語は何であるか」という質問をしたら, 「一番大事な言語は自分の生活を保障してくれる言語である。日本に住んでいる現在は日本語である」という答えだった。Bさんは40代になってから来日したのであり, 日本語はあまり上手ではない, とりわけ, 日本語の読み書きは全然できないが, とにかく, 日本語に自分の言語アイデンティティを結びつけようとしている。Nさんは, さらに, 「英語, タガログ語, 故郷のイロンゴ語は, どれも自分にとって大切であり, 捨てられない」と述べている。Nさんの回答から判断すると, 自分自身でははっきりと意識していないとしても, Nさんの用いるすべての言語が大切で, 自己のアイデンティティに結びついている状況, つまり, 多元的な言語アイデンティティを持っていると判断することは可能だろう。

この二人を見ると, 言語とアイデンティティの結びつきが自然体で行われているという印象を受ける。人生の途上で出会った言語を必要であるゆえに習得していく。自分がそこで過ごした時期と場所がその言語と結びつき, 自然と貴重な体験・思い出となっている。

## 5.2 分裂したアイデンティティと多元的なアイデンティティ

人間が, 新たな言語と出会い, それを学んでいく過程において, 当然のことだが, とまどい, 混乱が生じて, 言語アイデンティティは分裂を経験することになる。その分裂は, 多くの場合, やがては統合へと向かい, 多元的な言語アイデンティティとなっていく。言語アイデンティティが分裂すると, 同時に, 統合への方向, つまり多元的な言語アイデンティティを育てる動きがすでに始まっていると考えられる。その意味でこの両者はきわめて似ている。

ここで, 「言語アイデンティティの分裂」と「多元的言語アイデンティティ」はどのように異なるのかと質問が出てこよう。実は, 具体的な違いはないだろうと思われる。要はその人の主観的な判断であるからだ。その人が複数の言語を前にして, とまどい, 混乱を感じたり, 自分が何者か分からなくなるのならば, 否定的な表現である「分裂」という表現を用いた方がいいだろう。しかし, この状態に対して, 納得したり, 自信を持つようになるならば, 肯定的な表現を用いて, 言語アイデンティティは「統合」されたのであり, 「多元的言語アイデンティティ」になったと称することができよう。

インタビューしたフィリピン人女性の中には, 自分の価値を多言語を使えるという点に見いだす人がかなりいた。彼女たちは, 多言語につながる自分自身の姿に納得しており, それに肯定の答えを与えている。この場合は, 彼女たちは, 多元的言語アイデンティティの持ち主と考えられる。

だが, 彼女たちの子どもたちについては, 別の話になるようだ。多言語・多文化状態は, 大人には積極的な意味で「多元的なアイデンティティ」と称することができよう。しかし, 子どもたちにとっては否定的な意味を持つ「言語アイデンティティの分裂」と称すべき事例になることが

ある。次の章でそのことについて述べていきたい。

## 6. 子どもの言語アイデンティティ

### 6.1 子どもと母方の言語文化の関係

子どもに親は自分の母語を教えるかどうかという点であるが、金沢在住のフィリピン人女性の多くは、自分の母語は必要ないと考えて、子どもに継承しないようである。インタビューした範囲では、積極的に子どもに教えようとしている例はなかった。「なぜ、タガログ語で話しかけないのか」と聞いたところ、「タガログ語は覚えても無駄であり、子どもも覚えたがらないから」という答えが数例あった。

Cさん(30代女性)は、子どもに母親がフィリピン人であることは、学校では伏せておくようにと言っている。理由は、母親がフィリピン人であると子どもが差別を受けるかもしれないとの懸念からである。子どもたちも積極的に自分の母親の国籍を語りたがらない。このような状況では、子どもが母親の言語に関心を示すようになるのは難しい。

しかし、これらの子どもたちだが、必ずしも、フィリピンの言語とは無縁になり、もっぱら日本語を習得して、そのまま日本人としてのアイデンティティを身につけていくわけではない。女性たちの結婚に至るまでの経緯がかなり複雑で、その後も複雑な状況が続く場合があり、子どもたちの言語習得は様々なパターンがでてくる。そのために子どもたちの言語アイデンティティの発達は決して一様ではない。

### 6.2 子どもたちの生活の背景

子どもたちの言語習得やアイデンティティの発達は、いくつかのパターンに分けて考えられる。一つは、フィリピン人女性と日本人男性の間に生まれた子どもが、そのまま日本人としてのアイデンティティと日本語を発達させてくるパターンである。二つめは、フィリピン人女性が前夫の子どもを日本に連れてきた場合である。その場合、日本人男性は子どもを自分の養子として認めることが多い。連れ子にとって、言語とアイデンティティがフィリピンから日本へと切り替えられるのである。三つめは、離婚死別などの何らかの理由により、フィリピン人女性が子どもを母国に住むフィリピンの家族に預けるパターンがある。あるいは、全員で母国に戻る場合もある。この場合は、子どもにとって、言語とアイデンティティが日本からフィリピンへと切り替わるのである。

実情はこれらのパターンが混合してかなり複雑になっている。例えば、あるフィリピン人女性は日本人男性と結婚して、二人の間に子どもが生まれる。次にフィリピン人女性は母国から前夫との間の子どもを日本に呼び寄せて一緒に住むようになる。言語や文化の背景が異なる兄弟姉妹ができあがる。しかし、しばらくして離婚して子どもたち全員をフィリピンの祖父母のところに預ける。その後、別の日本人男性と再婚して、再度子どもたちを日本に呼び寄せる。このような複雑な事例がかなりあり、子どもの言語習得やアイデンティティの発達はどのようになるのか、見極めるのはかなり難しい。これほど複雑ではないとしても、インタビューでは以下のような例があった。

①Dさんは、前夫(フィリピン人)との子ども二人を連れ子として、日本人の夫と一緒に住んでいる。年少の子どもは、急速に日本語を覚えていくが、年長の子どもは、ある程度大きくなってから日本に来たのであり、さらに新しい父親との折り合いが悪かったり、学校でいじめにあった

りしたので、日本語への親近感がうすく、習得もやや遅い。

②Eさんは、日本人の夫との離婚後、子どもをフィリピンに帰して親戚に面倒を見てもらっている。子どもを日本語学校に入れようとしたが、うまくいかず、現在は子どもは現地の学校に入っている。その子どもの日本語への親近感は急速に薄れている。

③Fさんは、日本人の夫との離婚後も子どもと一緒に日本に住んでいる。生活保護を受けたりして、何とか生活しているのだが、子どもに関しては、日本人としての意識を持ち、日本語をきちんと覚えていった。しかし、その子どもはせっかく入った高校を何らかの事情で中退していて、現在は定職が見つかっていない。

④Gさんは前夫(フィリピン人)との子どもをフィリピンに残している。この場合は送金だけ行っているが、フィリピンに住む子どもの日本への関心はほとんどない。

⑤Hさんは、オーバースティであるが、子どもを内縁関係の日本人男性が認知したので、日本国籍の子どもの養育者として日本在住が認められている。子どもは現在小学校に通って、日本語を覚えて、日本人としての意識を持つようになってきている。しかし、親であるHさんは自分がオーバースティであることが心理的な大きな不安要因となっている。

⑥Iさんは、フィリピン人の夫との間に生まれた子どもをフィリピンに残してきたが、日本人男性との再婚後、日本に呼び寄せ、さらに、その夫との離婚により、その子どもをフィリピンに帰したが、別の日本人男性と結婚したので、再び日本に呼び寄せている。その子どもたちは精神的に不安定な傾向が見られる。

### 6.3 子どもの言語アイデンティティ

子どもの言語アイデンティティの発達を考える場合、通常は、子どもを持たない初婚の男女どうしが出会い、生まれた子どもは同一の家庭環境の中でずっと育てていくことを想定する。しかし、フィリピン人と日本人の国際結婚では、上記のような複雑な例があるので、この子どもたちは、順調に日本文化に馴染み、日本語を自分の言語アイデンティティにしつつあると一括して述べることはできない。

子どもは、環境が変わるごとに、日本語の環境へ、タガログ語の環境へ、すんなりと入っていたのか疑問である。さらに、日本人の継父への反発、フィリピン人であることを学校でからかわれた経験、母が貧しい国からの出身という事実を知ることなどで、子どもの言語アイデンティティはかなり複雑になる。そして「言語アイデンティティの分裂」という現象、つまり自分の言語アイデンティティが何か分からなくなる状態になる。そこでは登校拒否、食欲不振、奇矯な行動、性的に逸脱した行動、が見られたりする。この場合は複数のアイデンティティが彼らに否定的に作用していることになる。子どもは、複数の家庭、複数の言語、複数の文化を経験するのだが、そのことが子どもの自我の発達にかなり影響することは間違いないだろう。

Jさん(20代女性)は、そんな一例である。彼女は、10代の頃は義父とあわず、学校にもとけ込めず、日本語を覚えようとせず、結局高校を退学して、荒れた生活をしてきた。数年ほど、男の子のような姿格好をしていると職をかえていたが、現在は、定職を持ち、落ち着いた生活をしている。今では、日本語とタガログ語のバイリンガルとして、両言語が彼女の言語アイデンティティの基礎になっている。このように、ある程度時間をかければ、自分の「とまどい」にも何とか納得のいく答えを見つけ出していく子どもたちもいる。しかし、Jさんのような例に対して、アイデンティティの問題にいまだに自分なりの回答を見いだせずに苦しんでいる子ども達もい

る。

#### 6.4 学習言語と生活言語

生活言語(BICS)と学習言語(CALP)<sup>9</sup>の視点から子どもたちの言語問題について考えてみたい。現在、学校現場では、外国人の子どもの教育に関して、この両者の違いが意識されるようになってきた。一般に日常生活で用いる生活言語は1, 2年で身につくが、抽象的論理的な思考と結びつく学習言語は、子どもが移住してきた年齢によるが、習得に5~7年ぐらいかかると言われている。そのために、学校現場では、編入してきた外国人の子どものが、表面的には流暢に日本語を話すようになって、生活言語のレベルしかない場合があり、日本人の子どもとまったく同じ授業を受けさせるべきではないと言われる。その子の学習言語能力はどれくらいかを見極めてから判断すべきようである。

連れ子としてフィリピンから日本に来た子どもたちが、やがてはクラスの中に溶け込み日本語も上手になったように見えて、教員側の判断で、もう大丈夫と日本人の子ども達と同じ教室においておくと、実は学習言語は分からないために、授業について行けないこともある。この場合は、日本語教室や国際教室などに取り出して教えるべきだったのである。

ただ、母語で学習言語を習得する段階まで達していれば、カミンズなどによれば、新しく習得する言語の学習言語は比較的容易であると言われている。例えば、ある言語で分数・小数の概念を理解していれば、日本語で分数・小数の概念も容易に理解できるのである。そのために、年長の子どものが編入してきた場合は、母語でどの程度学習言語能力が付いているのか知っておくことは必要である。

#### 6.5 知性化

現代社会は知性化が進んでいるという指摘がある。ジェームズ・フリンというニュージーランドの心理学者は先進国では、過去数十年にわたって人々の平均的な知能指数が向上していると報告している。これはフリン効果として知られていて、10年ごとに平均知能指数は3ほど上昇すると言われている。たとえば、アメリカでは、子どもの平均的な知能指数が1930年では100であったが、1997年では120ほどに上昇したと言われている。

子どもの知能指数が向上している要因として、映画やテレビ、テレビゲームなど知的発達を促す媒体が急速に増加していること、身の回りの物が含む情報量が増加していることが挙げられる。この現象は先進国に限らず、世界全体で見られる。社会の知性化の根本には、言語能力の深化がある。知らなければならぬ語彙数は常時増えている。ますます精緻で複雑になっていく論理の使い方に慣れていくことが必要になっている。すべての職業が知性化しているので、どの職業も言語に頼る度合いが増大している。その社会で使われる言語が分からないとその社会への参加が難しくなる、ということは過去も同じであったが、その難しさが強まっていると言えよう。過去においても、ホスト国の言語に熟達していない移民たちは生きていくうえで苦労したのだが、今日の社会では、その苦労はひととき増大している。

移住してきたフィリピン人の子どもたちが学習言語を身につけられずに、その結果高校への進学をあきらめたり、せっかく入っても中退することがよくある。現代の日本で働いていくには、高卒の資格はどうしてもほしいものである。高等学校で学び知識を習得することは、知性化の進む現代において最低限、必要なことであると言えよう。

生活保護を受けているフィリピン人女性が何人かいる。行政は、そのような家庭の子どもの高校進学を援助している。就学費用(授業料, 入学金, 教材費など)は支給されるのである。高校に行かないことで起こる「貧困の再生産」の防止の観点から見れば, 子供を自立・就労させていくためには高校就学が有効な手段である。しかし, 問題になるのは, 学習言語としての日本語である。そこまでの日本語のレベルに達していないと高校の授業について行くことは難しい。知的抽象的な日本語の語彙をある程度習得して, 日本語による論理的な思考力に慣れていなければならない。

## 6.6 世界観, 論理的思考力と語彙

言語と思考の発達は結び付いている。子どもたちは大人になるにつれて世界観を樹立していく。世界観と言語の習得は緊密な関係がある。語彙数が増えていくにつれ表現が豊かになり, 世界理解が深まっていく。言語を介して諸々の概念を操ることで, 論理的な思考力ができるようになる。それにより日本へ移住してきたフィリピンからの子ども達は自分なりに世界を解釈することができるようになる。世界を解釈できるようになれば, 自分でこの日本社会という世界に対して能動的に働きかけて, ついには自分自身の手で変えることも可能になる。人は, 言語によって, 内省して自らの行動を律していくわけだが, 自分自身を内省できる言語を大人になるまでには持つようにしないと重大な問題が生ずる。自分の周りの世界に能動的に働きかけて世界を変えていくという態度が養われずに, 周りの世界を受動的に受け入れるだけになる。たしかに, 周りの人々の話す言葉が, ほとんど意味が分からないのならば, 周りの世界をそのまま受け入れるか, あるいは拒絶したり, 閉じこもったりせざるをえないのである。実は, 何人かのフィリピン人の子ども達には, そのような傾向が見られる。

## 6.7 母語保持教育

家庭の事情から, 日本とフィリピンの間を行き来する子どもたちは, 日本語と母語のどちらの言語を手がかりにして, これから自分の係わる世界を変えていく能力を深めていけばいいのだろうか。

それはどちらかの言語であると決めることはできない。その選択は一人一人の人生が異なるように子どもによって異なるはずである。しかし, できたら, 二つの言語から選択できるような環境を与えることができればと思われる。子どもは日本語か母語かという選択が常にできるようになっていることが望ましい。最終的には, フィリピンに住むようになる子どもも多いのであるから, 日本語しか選択できない状況は望ましいことではない。

移住者の多くが女性である場合の子どもの母語保持の問題は, 従来は関心をよばなかった。この分野は母語保持教育の研究の死角である。国際結婚という場では, 日本というホスト社会の言語文化だけではなくて, 母親の言語文化への関心も子どもが持つことは望ましい。子どものアイデンティティは両方の言語文化に立脚すべきであろうから, 何かの母語保持教育が必要であろう。

しかし, 日本という社会に住んでいて母語保持教育がはたして可能だろうかとの質問が出るかもしれない。来日してきた子ども達への日本語の教育だけでも精一杯なのに, 母語保持の教育まで手が回るだろうかという疑問である。しかし, 少なくとも, 母語保持教育が難しいからといって, 母語保持教育が不要という結論はでないように思える。

いずれにせよ, 母語と日本語の, どちらの言語にも深く関与することができなくて, 言語を介

した思考力や創造力を十分に伸ばすことができない子どもが生じていることは問題である。それはよくダブルリミテッドと呼ばれている。「言語アイデンティティの分裂」とも言うべき深刻な状態を示している子どももいる。このようなフィリピン人の子どもたちへのサポートは日本社会全体が取り組むべき問題なのである。

### 6.8 フィリピン人のことも達のロールモデル

フィリピン人の子どもたちにとって、ロールモデルの問題もある。子どもたちは誰を見習って成長したらいいのか、どのような大人になったらいいのか分からないのである。これも自分自身のアイデンティティをどう確立するかという問題である。

アイデンティティの樹立に深く関係するのはロールモデルの問題である。ロールモデルとなるのは通常は親であったり、その地域で活躍している同国人の年長者である。しかし、家庭環境が複雑であったり、父親が不在だったり、引きこもりがちであるとロールモデルを見つけることは難しくなる。その場合、子ども達は深刻なアイデンティティの危機に面するかもしれない。

このような子ども達にどのようにしてロールモデルを提供できるか。もしもフィリピンコミュニティがあれば、コミュニティの大人達が、モデルを提供することも可能であろう。しかし、それが無理なのであれば、可能性としては学校という場で、日本人教員の手によって提供することも一つの方法として考えられる。

## 7. おわりに

現在金沢に住むフィリピン人の女性達は多言語の話者であり、「多元的な言語アイデンティティ」の持ち主であると考えられる。しかし、子どもたちは、フィリピンと日本と居住する場所が移り変わる経験をする、接する言語や文化が頻繁に変化することになり、自分の存在の基となるアイデンティティや思考の基となる言語を身につけづらくなる。言語アイデンティティの分裂とも言うべき状態になる。

その解決策の一つは母語保持教育をしっかりとおこなうことだが、それはフィリピン人のコミュニティがあれば、その中で行うことができるだろう。現状ではコミュニティは存在しないのであるが、「母と子で学ぶフィリピンの言語と文化」というような自学学習を行う小さな集まりが地域単位で育っていくことである程度は可能になるのではないか。

ところで、フィリピンと日本では経済連携協定(EPA=Economic Partnership Agreement)が 2008 年から施行され、フィリピンから看護師候補者が来日している。さらに介護士も加えて、2009 年度は、看護師 93 人、介護士 190 人と計 283 人が来日している。2010 年度の見込みは、看護師 51 人、介護士 75 人と計 126 人である。エンターティナーや労働者として、日本で働くことが多かったフィリピン人だが、将来は看護師などとして医療関係で働く人が増えることが予想される。

2010 年の 3 月に、日本の看護師国家試験を受けて、インドネシア人 2 名とフィリピン人 1 名が合格したとのことである。合格率は低いのであるが、とりあえず、フィリピン人の医療関係者が働くようになったことは喜ばしい。これを突破口にして他の専門職の分野でもフィリピン人の移住が進むことが望ましい。とりわけフィリピン人男性の移住が待ち望まれる。男性がたくさん来て永住権を持つようになると、フィリピン同士と一緒に住む家庭ができて、やがてフィリピンコミュニティが各地に成立していくと思われる。その時には、母国の言語や文化をどのように継承させるに関して、より具体的で実現可能性の高い案が出てくるとと思われる。子ども達の抱え

る「言語アイデンティティの分裂」という問題にも解決策が出てくると期待される。

## 参考文献

Constantino, Renato. (1982). *The Miseducation of the Filipino*. Quezon City: Foundation for Nationalists Studies.

月刊『イオ』編集部 (2006) 日本の中の外国人学校 明石書店

河原俊昭 (2004) 在住フィリピン女性の新しい言語アイデンティティ 小野原信善・大原始子(編) ことばとアイデンティティ pp.177-200 三元社

国立国語研究所「病院の言葉」委員会 (2008) 「病院の言葉」を分かりやすくする提案(中間報告) 国立国語研究所 「病院の言葉」委員会

朴三石 (2008) 『外国人学校』 中公新書

## 参考 URL

名古屋学生青年センターだより 2008 年 早春号 No.83

[http://www.nskk.org/chubu/nyc/images/centerdayori\\_83\\_all.pdf](http://www.nskk.org/chubu/nyc/images/centerdayori_83_all.pdf) (2010 年 12 月 26 日収録)

入国管理局統計 2010 <http://www.immi-moj.go.jp/toukei/index.html> (2010 年 12 月 26 日収録)

2009 Overseas Employment Statics (Philippine Overseas Employment Administration)

[http://www.poea.gov.ph/stats/2009\\_OFW%20Statistics.pdf](http://www.poea.gov.ph/stats/2009_OFW%20Statistics.pdf) (2010 年 12 月 26 日収録)

---

<sup>1</sup> フィリピンではタガログ語が国語であり公用語である。ただし、国語・公用語に一民族であるタガログ族の言語を意味する「タガログ語」という表現はふさわしくないとして、公的には「フィリピン語」という表現が使われる。本稿では国家のレベルではフィリピン語という表現を用い、個人のレベルでは、タガログ語という表現を用いていく。

<sup>2</sup> 日本では興行ビザで働くフィリピン女性が多かったが、2004年にアメリカの国務省人身売買監視対策室の人身売買報告書の中で、興行ビザで働く若い外国人女性の日本入国を「性的搾取による人身売買である」と批判した。日本政府はこれを受けて、興行ビザの発行を厳格にした。

<sup>3</sup> 当時、フィリピン語(タガログ語)は公的にはピリピン語と呼ばれていた。

<sup>4</sup> 外国人集住都市会議とは、太平洋側の工業地帯にあり日系ブラジル人が多く住む都市である。これらの都市が集まり「外国人集住都市会議」を2001年から毎年開催している。現在参加しているのは、28都市であり、群馬県(伊勢崎市、太田市、大泉町)、長野県(上田市、飯田市)、岐阜県(大垣市、美濃加茂市、可児市)、静岡県(浜松市、富士市、磐田市、掛川市、袋井市、湖西市、菊川市)、愛知県(豊橋市、岡崎市、豊田市、西尾市、小牧市、知立市)、三重県(津市、四日市市、鈴鹿市、伊賀市)、滋賀県(長浜市、湖南市、甲賀市)である。

<sup>5</sup> 外国人学校に関して、主に、朴三石(2008)と月刊『イオ』編集部(2006)を参考にした。

<sup>6</sup> 日本聖公会・名古屋学生青年センターによって設立されており、現状では20名ほどのフィリピン人の子どもたちが学んでいる。ホームページには現在製作中との表示がある。

参照→ <http://www.nskk.org/chubu/nyc/elcc/elcc.html>

<sup>7</sup> インタビューした時期は2002年から2003年にかけてである。その後2006年に再度インタビューした。

<sup>8</sup> インタビューした時期は2002年の夏である。

<sup>9</sup> BICSはBasic Interpersonal Communicative Skillsの略、CALPはCognitive Academic Language Proficiencyの略である。